



# 小論文

時間 120分

## 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはならない。
2. この問題冊子は18ページである。印刷不鮮明の箇所などがある場合には、監督者に申し出ること。
3. 解答用紙の指定欄に必ず受験番号を記入すること。
4. 解答はすべて別紙の解答用紙に横書きで記入すること。
5. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
6. 解答用紙は持ち帰らないこと。

＜資料A＞と＜資料B＞を読んで、下記の設問に答えなさい。

＜資料A＞田中輝美「地方季評 若者の旅立ちの季節 気になる大人の押しつけ」  
(朝日新聞, 2022年3月3日)

＜資料B＞「帰れる場所をつくる 本宮理恵」(田中輝美・法政大学社会学部メディア  
ア社会学科藤代裕之研究室『地域ではたらく「風の人」という新しい選  
択』, ハーベスト出版, 2015年)

(1) ＜資料A＞下線部①の「二つの『押しつけ』」とはどのようなことか、説明しなさい。

(1行20字詰め, 10行以内)

(2) ＜資料B＞下線部①について、本宮さんのどのような「悔しさ、葛藤、経験」が、「帰ってこれる島根をつくる」という言葉につながったのか。大学時代と島根にUターンしたあとの2つの時期について、彼女の「悔しさ、葛藤、経験」に触れながら説明しなさい。

(1行20字詰め, 25行以内)

(3) ＜資料A＞下線部②の「『帰ってきたい/こられる』場所」、＜資料B＞下線部①の「帰ってこれる島根」とはどのような地域か、2つの資料で示された事例や見解をふまえて、あなたの考えを論じなさい。

(1行20字詰め, 25行以内)

(注意)

解答にあたっては、解答用紙の1マスに1字を使い、句読点、引用符、括弧などはいずれも1字として扱うこと。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。書き出しおよび行を改めたときには、1マス空けること。

<資料A> 田中輝美「地方季評 若者の旅立ちの季節 気になる大人の押しつけ」(朝日新聞, 2022年3月3日)

「十五の春」という本に、沖縄の離島の子どもたちが、高校進学のために島を旅立つ様子が描かれている。一般的な地方では「十八の春」だろう。桜が咲く季節、高校を卒業した生徒が家族や友人に見送られる姿を見かける。大学進学のために地元を離れ、その多くが都市へと向かう。春は地方から見ると人口流出の季節と言える。

143校と2校——。立地する大学が最も多い東京都と、最も少ない島根・佐賀両県の数字だ。2位の大阪府56校、愛知県52校と続き、少ない方は鳥取県が3校、香川、徳島の両県が4校。専門学校も同様に都市に多い。大学や専門学校など高等教育進学率が8割を超えるなか、地方では県内進学を希望しても受け皿が足りない。こうした構造は、地方の若い世代に移動を強いる。

だからといって短絡的に都市にある大学・専門学校の合格者数や学校数を減らしたり、進学を目指す生徒を地元に押しとどめたりすることが望ましい解決策だろうか。島根県から大阪の大学に進学した私自身を振り返れば、仏像にハマっていた当時、寺院が多くある関西への進学が実現したことがうれしく、大学生生活への期待が膨らむ「十八の春」だった。地域にとっての人口流出と、一人の人生にとっての選択は別物だ。

一方、「ローカル志向」と言われる若い世代の価値転換も指摘されている。物質的な消費志向よりも、人のつながりや安心感などに重きを置く傾向も見られ、結果として「出て行く場所」だった地方へのまなざしに変化の兆しが生まれているのだ。

そうした中で、島根では県内進学を後押しする動きがある。多くの高校が2校ある地元大学と連携し、大学生とともに考える授業などを充実させている。受け入れる大学側も、昨春から、定員に県内高校生枠を設ける入試改革を行った。

ここで注目したいのが、「ローカル・トラック」という考え方だ。大阪大学の吉川徹教授が示した概念で、地方の出身者が地域移動を選択していく進路の流れを指す。

1990年代の島根県のローカル・トラックは、都市に流出して就職する都市定住、流出後に県内に戻るJターン、出身市町村まで戻るUターン、県内に進学・就職す

る県内周流の4類型に分かれていた。どの種類の流れが強いのかによって、都市定住型が強い「過疎流出モデル」や圏域全体で周流する「大規模圏モデル」などがあり、吉川氏は、その県のローカル・トラックをどのモデルに導くのか、地元の行政や教育機関が主体的に決めることが重要ではないかと問いかける。

2校の改革は「地域の担い手を地域で育てる」という県内周流の流れを強くすることに向けた試みに位置付けられるだろう。入試改革には「大胆だ」という反応も聞くが、これまでがこうした取り組みがあまりにも弱すぎた。

これから問われるのは、大人の姿勢だ。私は二つの「押しつけ」が気になっている。

①  
一つは、人口流出に歯止めをかけたい意識から地元に残って欲しいという「大人の事情」の押し付け。出席したある自治体の会議で、目標数値達成のために「首根っこつかまえてでも残らせる」と発言した公務員がいた。思わず言った。「個人の幸せを後押しするのが行政ではないのか。ひとりひとりの幸せの延長線上に、幸せな地域が達成されるのではないかと」。

もう一つは逆で、自分の価値観を押し付けてUターンや地元に残ることを歓迎しない大人もいることだ。「それでいいのか」「こんなところより都会で働いた方が良いのではないかと」否定され、暗い顔をする若い世代から相談を受けたことは、一度や二度ではない。確かにかつては都市に行くことがわかりやすい「正解」ととらえられていたが、ローカル志向に見られるように、今、若者の価値観は多様化している。

大人の姿勢として参考にしたいのが、広島県三次市<sup>こうぬ</sup>甲奴町で自動車販売を手がける小川治孝さん(49)だ。本業とは別の農業会社やNPO法人を仲間と設立し、新たな雇用や起業家を生んできた。地元で生まれ育った大学生とブルーベリーを栽培し、次はワイン製造に動く。甲奴には、一度は外に出た子どもたちが自分の意思で帰ってきている。「その子たちや移住者が楽しく働けるよう、そして地域課題の解決のためにも、地域のコトやモノを資源ととらえて事業をつくっていききたい」と話す。口癖は「帰ってきたくなる地域をつくろう」。

私も同じ思いで地元に戻ってきた。昨春着任した大学では、「地域の担い手を地域で育てる」という挑戦に加わっている。地方で暮らす上での課題はもちろんあるが、課題はともに向き合い、乗り越えていけばいい。「残らせる」または「帰ってこない方

がいい]と一方的に押し付けるのは、大人の思考停止に見える。大切なのは、次世代の幸せを願いながら、「暮らし続けたい/続けられる」「帰ってきたい/こられる」<sup>②</sup>場所であるために、一歩ずつ行動していくことではないだろうか。少なくとも私は、そうありたい。

<資料B>「帰れる場所をつくる 本宮理恵」(田中輝美・法政大学社会学部メディア社会学科藤代裕之研究室『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』,ハーベスト出版, 2015年)

\* <資料B>は, 法政大学社会学部の学生たちが島根にUターンした本宮理恵さんに取材を重ね, その成果をまとめたものである。

3人に1人が高齢者のまちでNPOを立ち上げ, 若者が集い挑戦する好循環をつくり出したのが本宮理恵さんだ。地方と都会の間で揺れ動き, 大好きだった兄の死によって地方に戻らざるを得なくなる。待っていたのはお茶くみ。面白い仕事はなかった。本宮さんは若者が自ら目標を持って地元「帰ってこれる」ようにするため, 立ち上がる。

\* \* \*

<毎年ヒーローが生まれる>

毎年ヒーローが生まれていく感じがする。廃墟みたいなところだったのが, その人が入ることでおしゃれなバーになったり, 飲食店や居酒屋になったりしてるんです。でも, ビジコンって運営する方が大変。出る人がいるかなーって。

ビジネスプランコンテスト(ビジコン)<sup>(注1)</sup>の舞台は島根県西部, <sup>いわみ</sup>石見地方にある<sup>ごう</sup>江津市。人口は24000人。3人に1人は65歳以上のまちだ。大きな産業や企業はない。若い人が出て行くのが当たり前の地域だった。本宮さんの印象に残っている1人が, 第2回のビジコンで大賞を受賞した多田十誠さん。受賞をきっかけに, 江津市中心部から離れた山と畑の中で「風のえんがわ」という古民家を改装したカフェを始めた。シェフの経験を持つUターン者だ。

食材にこだわって, 子どもたちに本当に新鮮でおいしい物を食べてほしいって, 地域の中でいいと思った物を自分で契約して取り寄せたり, カフェを拠点に子どもの遊び場を作ったり, 本を置いたりして人が交流する場所にもなっているの。

最初はアイデアだけだったのが、ビジコンをきっかけにプランがまとまり、共感が広がる。人口が少ないまちでカフェが成り立つのだろうかという点はみんな心配していたが、メディアにも取り上げられ、ビジコンで知った人からも応援されるようになった。さらに、昨年は、多田さんを支援していた仲間の山口さん夫妻がビジコンに応募し、地元の麦と麴こうじを活用してクラフトビールを造るプランで大賞を受賞した。

これまでのビジコン受賞者の活躍を見て「何かしたい」って立ち上がったっていう、ちょっと感動的なビジコンでした。やりたかったのって、こういうことかなって思っ  
て。誰かが自分の思いを堂々と語って、それを見て「あ、自分もやろう」って言う人が  
たくさん出てきたら、地域は面白くなるって思わない？

若い意欲のある人たちが次々とエントリーし、新しいビジネスの芽が生まれてきた。UIターン者も増えてきた。本宮さんは、江津に来たらいろんな人に会える、と外の人に言われたことが何よりうれしかったという。

だって5年前は私自身も「江津に行って何があるの？」って言われてたのに、今だと「あの江津ね」「あの人に会いにいったの？」とか言われるようになった。江津にわざわざ行く人が増えたんですよ。視察も含めて、江津に飲みに行く、会いに行く…やった！私の思惑通り。

江津で挑戦の循環をつくり、「島根に帰ってきなよ！」と自信を持って言えるようになるまでには苦難や葛藤があった。

<流れついて徳島ですよ>

本宮さんは兄との2人兄妹。兄は優秀で、その背中はいつも何歩も何十歩も先にあった。背中を追いかけるけれど、どうやっても追いつけない。大学受験の時もそうだった。

兄がいた大阪に行きたかったんですが、受験は失敗でした。

大学で「これをやろう」という具体的なイメージはなかったが、漠然と国際問題や地方のことなどを扱う社会学を学びたいという思いはあった。結果はセンター試験がふるわず、志望する大阪教育大はあきらめることになった。

島根から出たい、どこでもいいから大学に行きたい。私大に行く経済力もないので。じゃあ、国立でってなると、少ないですよ。流れ着いて徳島ですよ。

合格したのは徳島大学。大阪に行くはずが、瀬戸内海を渡っていた。都会に行くはずだったのに。こんなはずじゃなかったのに。まるで島流しの気分だった。

大学2年生のときフィリピンで行われたワークキャンプに参加した。当時は国際問題に興味があった。島根から出たい、都会に行きたいと思うのと同じくらい、世界に出ることに憧れていた。ワークキャンプの参加者はほとんどが慶応義塾大学やICU(国際基督教大学)といった東京のエリート学生。その中に地方大学の学生がぽつんと1人。周りの参加者との間にギャップを感じた。

フィリピンの孤児院とか山間部の様子を見たときに、私の中では島根の山奥の学校が浮かんできましたよ。都会の子たちは山間部に行くまでがしんどいとか、自販機はないし、本屋さんはないし、途上国の子はきついねって話をしている。でも私は、え、当たり前じゃんって思って。島根の山奥のお年寄りの状況と変わらないじゃないかと思っていて…。

フィリピンと日本の地方には同じような問題がある。なのにどうして外国のことばかりに目を向けるのか。国際問題に興味があつて行ったワークキャンプだったが、そこで図らずも根っこは地方だと自覚した。徐々に世界から地方に心が傾いていった。

「え、自分の住んでいる地域の問題はいいんですか？」って。島根といえば少子化、高齢化、過疎化。あ、じゃあ島根を何とかしなきゃいけないなと思って。まだ若かつ



たので、すっきり地方の方に気持ちが行けたのかっていうと、迷いがあったんです。でも反骨精神とかがあって。彼らは国連とか赤十字とかを目指すわけですよ。それになくそって思って。都会に行った大学生には負けないぞって思ったんです。

慶応やICUのエリートたちが迷いなく世界を目指していくことが悔しかった。本宮さんには、彼らと同じように世界を目指すことはできなかった。その差に悩まされた。

学歴コンプレックスだったと思うんですけど、そこまで目指せないって思ってたんですよ。環境も違うし…就職活動をしているときも、学校名で落とされるというのもあったので。でも彼らと連絡を取ると、来年から本当にインドネシアで働くとか言っていて「マジかよ、おい」って。自分はそこに行けない悔しさがあるけど、何とか島根でやっていきたいというのがあったような…。そんな大学4年生でした。

#### <島根に帰らなきゃという呪縛>

本宮さんには大学時代、もう1つ大きな出来事があった。

兄は22歳で亡くなっているんですよ。自殺です。就職活動をしていて、理系だったんですけど、もっともっと研究をしていきたいと。でも自分は長男なので帰らなくては行けないって呪縛がずっとあって、銀行に受かっていたんですけど…。

兄にかけられた「呪縛」。それは家を継ぐために島根に帰るということ。兄は、自分の希望をかなえるために都会で研究し続けるのか地方に帰るのか、その2つの間で揺れていた。島根のトップ高校、県立松江北高校から大阪大学に進学。そして銀行に内定という島根のエリートコース。だが、兄は島根に帰ることに抵抗感を持っていた。周りの同級生に、「島根に帰るのってクソじゃないか」と言われていたのだ。

成功ルートなんですけど、本人はずっとずっと悩んでいて、地方か都会か。それで大学4年の時にうつになってしまって。最後は亡くなってしまったんですよ。私がハタチの時。私がフィリピンに行っているときはちょうど入院中でした。

2人兄妹の本宮さんは兄の死後、親の面倒を見ることを考えざるを得なくなった。ずっと追いかけていた背中が消えてしまい、憧れの存在がいなくなったショックが本宮さんを襲う。それに追い打ちをかけるように「呪縛」が本宮さんの元へやってきた。

兄の影響がすごく大きくて。私は島根の普通高校に行き、地方大学に行った。兄は成功ルートを選んでいるのに、亡くなってしまった。ずっと帰りたくないって思ってたけど、帰らなくてはいけないって。私も友達に言われましたよ。「島根に帰って何するの。つまんないし」。先生にも言われました。「島根に帰って何があるの」って。

<「何もないけど帰ってこい」>

就職活動を始め、島根の企業も受験したが、あまり魅力的に感じなかった。都会に出ようとベンチャー企業を受験。内定をもらったが、本当に就職すべきかどうか迷っていた。面接でずっと会社に残ってほしいと言われることに違和感があった。

面接で「うっ」て思うんですよ。ずっと東京や大阪にいたいのかとか、自問自答始めて、すごく悩みすぎてしまって。気持ちもだいたい病んで、よくあるじゃない、就職うつみたい。そこまでなっていないけど。2ちゃんねるも見て、ブラック企業というか、自分の行こうとしているところは全部ブラックじゃんってなって。

5月に就活を中断して島根に帰り、ゆっくり過ごす中で、元気が出る瞬間があった。実家から見える中国地方最高峰の大山や小学校時代に歩いた近所の川。もっと自分は地に足のつく生き方をしなければいけないのではないかという気持ちが浮かんだ。就職活動を再開したときには、経験を積んだ上で島根に帰りたと思うようになっていた。

じゃありクルートならどうかって。独立大歓迎だし、面接でも「ここであなたは何をしたいんですか」と言われて、「ゆくゆくは島根で仕事がしたいです」って言ったから、「それはいいね」って肯定してくれて…。

「3、4年後に島根に帰ります」と宣言してリクルートに入社し、岡山支社に配属された。上司に「その分ここでしっかり実力をつけなさい。逆に先のビジョンがある人の方が成長できるよ」と言ってもらえたことが励みだった。

1年目はなかなか成果が出なかったけど、2年目は1000人の中から年間営業ベスト20に選ばれたんです。同僚からは「先輩から引き継いだお客さんの対応や、新人育成がしんどい中で、よく頑張ったね」と言われました。いいお客さんとも出会えたし、とても楽しかった。

宣言通り退職したのは4年後。次のステップで首都圏に異動するかどうかというタイミングであった。

親も帰ってこいって言ってたんです。「何もないけど帰ってこい」って。腹立ちますよね、何もないって言われると。

なぜ何もないのに帰らなくてはいけないのか。親の何気ない言葉が心に引っかかる。しかし、一旦区切りがついたこともあり、「とりあえず」Uターンした。

< 3カ月で収入 5000 円 >

島根では、企業には属さず、フリーランスとしてやっていくことにした本宮さん。リクルート出身の若い女性という肩書きも有利なはず。経験を積んで、実力をつけて帰ってきたという自信はあった。だが、得意の提案営業は通用しなかった。岡山は企業数が多く、飛び込みでもアプローチをかければ数字が上がっていった。しかし、岡山と島根では状況が違った。

島根は地域が狭くて、1人のトップがいて、その人が「うん」って言ったら通る世界があって。広告は、ほとんど行政の広告制作事業で、個人が入れる余地がなかったんですよ。今だったらそうは思わないけど、当時は思ってしまったんですね。リクルートと同じ営業をやっていて、島根が楽しいって思えなくて、悶々としたUターンになってしまいました。

本宮さんは、島根美少女図鑑の制作にも参加した。美少女図鑑は新潟発祥の「街に美少女を増やそう」というコンセプトで、主にスナップ写真で構成されるフリーペーパー。発行する地域のクリエイターが制作、モデルもその地域の女の子を採用する。地域の魅力を伝える取り組みとして全国でも注目されている。リクルート時代のお客さんから、島根でも作るという話を聞き、担当者を紹介してもらった。冊子は完成した。だが、本宮さんの得た収入は衝撃的な額だった。なんと3カ月で5000円。これでは到底暮らしていけない。

払うって言ってたんですけど、企画者との話もあって、全然利益が出なくて、駐車場代すら渋る自分になってしまって…つらいーって。まだフリーとして甘かったんです。どうしてもお金よりも実績をつくりたいって気持ちがあったんですよ。

そして心もお金も余裕がなくなり、フリーでの仕事は辞めることにした。転職を考えたとき、入りたい企業は島根にはなかった。

<これじゃいけん、これじゃいけん>

しかし、お金がないことにはどうしようもないため、安定的な収入が得られる安来市商工会に転職をした。商工会は地域の小規模企業、中小企業が加入し、経営支援を行う公的機関。1年間の緊急雇用の枠に応募した。その後の選択までの猶予期間としての就職だった。

入ってからまず最初にしたのはお茶くみでした。リクルートではお茶くみなんてしたことがなかった。でも、男性はお茶を出さない。女性が出すって文化がありました。すごく抵抗があって。そこでなんかちょっと嫌だなんて思ってしまったのと、そう思う自分も島根の企業に合わないんじゃないかと。

地方の職場に残る女性がお茶を出す文化。リクルートで新しい物をつくるクリエイティブな職場を経験していた本宮さんには違和感があった。

そのころは実家暮らしだったので、お金は安定しました。けど3カ月くらいで「これじゃいけん。これじゃいけん」となって。だから就活を始めました。

一度戻った島根だったが、再び外に出たいと考えるようになった。東京にある起業家を育成するNPOのETICに内定をもらい、広島メーカーのECサイト(注2)立ち上げの仕事も紹介されたりした。知り合った島根の会社の社長から採用したいという声を掛けてもらえたが、事務員としてだった。島根か、広島か東京か。苦しい地方か自由な都会か。

島根にとどまることも考えました。いろんな企業さんがあったし紹介してもらったんですが、今臨時なので、次も臨時。そういうスパイラルがあるんですよ。私を評価してくれた社長の会社はどんどん事業を拡大していたけど、紹介してくれた仕事は事務としてやってくれて。「んんー」って思ってしまったんです。

一度入ったら抜け出せない地方のスパイラル。声を掛けてくれる人も善意だが、うまくかみ合わなかった。地方の人たちは女性が営業する姿や、新しいものをつくっていく姿が想像できないのかもしれない。そう思った。島根を魅力的に感じなかった理由は他にもあった。

帰った時に女性のロールモデル(注3)に出会わなかった。すごいエッジがきいた人はいますよ。でも身近に描ける営業マンの姿がなかった。いったん小さくまとまった頭

で次の仕事を探したら、ロールモデルを探していて、いなかったからやっぱり島根で働くのは無理じゃないかなと。

<足りないのは覚悟だった>

帰っても思い通りにいかない。面白いことができないというジレンマに悩まされ続けた本宮さん。2010年その状況が一変する。転機は江津市のビジコン「GO-con」。地域の課題解決に興味のある若者を呼び込むために市が開催した。新規創業・経営革新部門と課題解決プロデューサー部門があり、本宮さんは後者に応募した。

最初は知人のツイッターをみてビジコンのことを知りました。江津には行ったこともなかったけど、なんだか面白そうだなって。応募する時は東京と広島と同じ、どこに行くかの選択肢の1つとして考えてました。

ビジコンに応募したものの、ETICに入るために東京に行くか迷っていた。岡山時代の知人からは「ETIC. でやった方がいい」とアドバイスされた。

島根で古書店を経営する尾野寛明さんにメールを送った。メンター(注4)としてプランを相談していた。「私の中では、長期的にみて自分のためになるのは、1年間東京のETIC. で働くことかもと思いはじめています。江津市は今でないといけない理由はあるのか。悩んでいます」。すると尾野さんから、長い長いメールが返ってきた。

足りないのは今すぐ地域に飛びこむ覚悟だと気付いた。現場に出て、江津でやってみようと決意。ツイッターに書き込んだ。「島根をもっともっと面白くするぞ」。そして彼女の核となる1つの「言葉」が生まれた。

「帰ってこれる島根をつくろう」ってコピーにして、しゃべりまくったんですよ。島根でやるぞって覚悟を決めた時に、自分がせんといけんのは、もっとワクワクして帰ってくる人を増やさないといけないって。「島根でこれするぞ」って帰る人を増やさないと兄も報われないなって。

①「帰ってこれる島根をつくる」。この言葉は本宮さんの悔しさ、葛藤、経験の全てだ。自分のあとに続く人たちが自分と同じ思いをしないように。やりたいことをやりたい場所で望んだようにできるように。このキャッチコピーを携えてビジコンに参加した本宮さんは大賞を受賞し、新しい世界に飛び込んでゆく。もうお手本など探してはいなかった。

最初は自分がNPOの経験を積ませてもらうって気持ちだったんです。「NPOで雇用するので、地域づくりのノウハウを学んでもらいます」って書いてあったんで応募したら、「あなたがNPOをつくってください」と言われて…「えっ？」ってなって。だけどやらなきゃって決心しました。事務所があるのかと思ったら、事務所の「物件は抑えたから」と言われて、電話線引くところから始めました。

本宮さんにとって予想外の展開。ビジコンで大賞を受賞したとはいえ、その土地に来たばかりの若者にNPOの設立を任せるのか。しかも相手は「お堅い」と思っていた行政、江津市役所からだった。想定していなかったレベルの大仕事。話が違う、そう感じてもおかしくないその仕事にも飛び込んでいった。ある日、メールが届いた。

島根県は、今が正念場だと思っています。県西部は、県東部に比較し、過疎・高齢化が10年早く進行しています。つまり、全国一とっていいほど厳しい状況です。それだけに、ここで「やれたこと」は全国モデルになります。ぜひ、力を貸してください。

送り主は、中川哉さん。ビジコンの開催を提案した市役所の女性。NPOの立ち上げにも深く関わっていた。こんな力強い言葉を言える行政の職員に出会ったのは、初めてだった。

何かワクワク感があったんですよ。みんなで一緒にこれからつくるんだって、波に乗っかりたかったんです。中川さんは「あなた色にNPOをつくってください」と言ってくださって。

この言葉が島根では自分の色が出せないと思っていた本宮さんを奮い立たせた。既存の枠組みに乗るのではなく、自分の場所、新しいものをつくっていく。こうしてNPO法人「てごねっと石見」が設立された。「てご」は、島根の方言で手伝いを意味する。

ありがたかったんです。ビジコンでコンセプトに掲げた「帰ってこれる島根」とか、大学生のインターン活用とかをNPOでそのままやってくれて言われたんですよ。じゃあ、と思って4月に江津に移住して。コンセプトはこれでやりますって言えたので、周りの人にも理解というか、応援してもらえる体制ができたので、怖さはなかったです。

同じ県内とはいえ、実家から140キロほど遠く離れた土地への引っ越し。だが、必要としてくれる人がいた。中川さんだけでなく、てごねっと石見の理事長の横田学さんも「待ってるからね。こんな楽しみな春は久しぶりだ」と期待を寄せてくれていた。江津で得られた、信頼できる人の存在。本宮さんの勢いは増していった。

<帰ってきてほしい人たちが帰ってきた>

江津での1年目は分かってもらえないこともあった。しかし、大学生をインターンシップで江津に呼び、お祭りやイベントを手伝ってもらうことで「江津に若者を呼んでくれる人。若い意見を伝えてくれる人」という立ち位置を獲得した。インターンは、社会人向けにも行うことになった。さらにSNSを通して人をつなげていった。

島根に帰ってきて、県外にいたときは分からなかった、島根の人のパワーに直接触れて、島根の魅力はまさしく「人」とであると確信したんです。でも、人の魅力は会ってみないと分からないんですよ。地理的な問題や情報発信不足とかがあって、加速度的に人脈をつくることは難しかったです。そんなわけで、「島根の挑戦するネットワーク」をSNS上でつくって、島根にUIターンするか迷っている同世代の若者に島根の人の魅力を伝えたり、想いを語ったりする場をつくって、帰ってこれる島根をつくろうとしました。



SNSで知り合った大学生がお盆や年末に島根に帰って来た時に交流する会を設け、若者のネットワークをつくった。その会の参加者から「同志に会えたような喜び、これからの未来がなんとなく明るくなっていくんじゃないかという希望を感じることができました」と言われ、とても励みになったという。島根は面白いという雰囲気生まれていった。

島根に帰ってきてほしいなと思ってた人がだいたい帰っているんですよ。(田中)輝美さん、三浦(大紀)さん…。ふるさと島根定住財団の原(早紀子)さんとか。人間的にも魅力的で、なんかやってくれそうと思っている人が帰ってきてるんですよ。もう、うれしいなあって…。うん、迷っている人がよしやるぞって帰ってこれる感じになってきたかな、今は…。

本宮さんが帰ってきてほしいと思う人が帰ってきた。その人たちが活躍しているのを見て、次の世代の人たちが帰ってくる。その循環を生み出したのは本宮さん本人だ。今なら胸を張って「島根に帰ってきなよ」と言える。

#### <次なる舞台>

本宮さんは江津で3年過ごした後、次なる舞台へ旅立った。江津の人から「理恵ちゃんはずっと江津にいるの?」と言われるようになっていた。ショックも受けたが、それは、江津ではおさまらない、という意味のほめ言葉だった。

江津の人たちは来るもの拒まず、去るもの追わず。ここでしっかり経験して、羽ばたいてほしいっていうのがあって、だから私も短期間集中で頑張るぞみたいな。一般的にUIターン支援って、定住しなさいってすごいプレッシャーがある。江津にずっと住めるかっていったら迷いがあった…まあ、引っ越しましたからね。やっぱり私3年ごとですね。スパンが。

本宮さんの新たな挑戦の舞台は奥出雲町にある生徒数約300人の県立横田高校。高校魅力化コーディネーターとして働く。隠岐島前高校で成功した高校魅力化プロジェクトが横田高校でも始まったのだ。

なんか高校に入るとき緊張しない？ 役場の人も公民館の人も、入りづらいって言うんだよ。職員室の雰囲気かもしれないし、先生たちの多忙さかもしれないし。あと、てごねっと時代に付き合った大学生が言ってたんだよね、高校のときには、帰る、帰らないの二者択一しかないと思っていたと。でも、そこはどうかせんといけんな一って思っている。

本宮さんの仕事は、キャリア教育プログラムの見直しだけでなく、高校生に地元の商店街を取材してもらいポスターを作る実習も担当する。授業を受けた生徒たちは「奥出雲に帰ってきてほしいって伝えたい」「地域の課題をもっと知って、解決できる方法をもっと考えたい」と本宮さんに話す。高校時代から地域の魅力を見つめて、自分の手で帰ってこれるまちをつくれることを学んでもらう。

地域、島根全体の価値感というか雰囲気が変わっているということは、自然に伝わる、気付くんじゃないかな。今だったら、田舎帰るのはカッコいいじゃん、って、間違いなくある。一昔前はそうじゃなかった。そういうのができただけでも、救われるかなって。

本宮さんの目には次の解決すべき地域の課題が映っている。それは子育て中の女性も地域の活動に関われるようにすることだ。結婚、出産したことで、これまでのように1人で気軽には動けなくなった。両親のサポートが受けやすいと思い、実家のある安来市に移ってきた。だが、いつも実家を頼れるわけではなく、夜間保育はない。まちづくりの現場では夜の飲み会が重要な役割を果たす。出会いもあり、本音も聞ける。

子どもの側においてあげたいという母親としての気持ちもあって、夜の飲み会もほとんど行ってないんですよ。行けなくなったのはすっごくきつくて、落ち込んでたんですけど。意味のない会議をやって続きは飲み会でやりましょうという男性的な構造に合わせていたんだと気付いたんです。高校ぐらいから昼間の会合でも話せるようになる訓練ができれば。会議の仕方を変えるとかグループワークを入れるだけでも出る意見は変わるじゃない。どうにかせんといけん。

(注1) ビジネスプランコンテスト(ビジコン)：個人やチームの参加者が提案するビジネスプランのなかから、優秀なものを選ぶコンテスト。選ばれたプランは、その実現に向けた支援が得られる場合が多い。

(注2) ECサイト：インターネット上に開設されたウェブサイトで、商品やサービスを販売する。EC = Electronic Commerce の略。電子商取引。

(注3) ロールモデル：自分の考え方や行動、キャリア形成のうえで、規範や手本になるような人。

(注4) メンター：自分自身の仕事やキャリアについて、また幅広く生活全般にわたって、指導や助言を与えてくれる人。

(問題作成の都合上、漢数字の一部を算用数字に改めた。注、一部のルビおよび小見出しの強調は出題者がつけたものである。)

# 令和5年度入学試験 小論文「出題意図」

## (入試情報公開用)

### 行政政策学類 一般選抜 後期日程

本試験は、田中輝美「地方季評 若者の旅立ちの季節 気になる大人の押しつけ」(朝日新聞, 2022年3月3日)と、田中輝美・法政大学社会学部メディア社会学科藤代裕之研究室(著)「帰れる場所をつくる 本宮理恵」(『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』, ハーベスト出版, 2015年)の2つの資料を用いて、受験者の読解力、要約力に加え、自らの体験や考えを資料と関連付けながら的確に論じる力を問うものである。

本学類において「21世紀の地域社会が直面している諸課題」に取り組むには、論説文はもちろんのこと、公文書や歴史的資料、地域で活躍する人々のインタビューや対談、自分語りなど幅広い文章を読み、地域社会の課題を重層的に理解したうえで、真に有効な対策を組み立てていくことが求められる。そのため本試験では、現代の若者の「移動」に焦点をあて、地域づくりのあるべき方向性を示した大学研究者の論説である<資料A>と、大学進学で地元島根を離れ、さまざまな経験を経て再び島根に戻った若者の葛藤や経験を、現役大学生が聞き書きした<資料B>という異なった特徴を持つ2つの文章を資料とした。

設問(1)は、<資料A>にもとづき、一人ひとりの若者にとっての人生の選択に際し、その意に反して、地元を押しとどめよう、あるいはそれとは逆に都会での就職を進めようとする「大人の押しつけ」について、本文に沿って説明させるもので、受験生の読解力と要約力をみるものである。

設問(2)は、<資料B>にもとづき、大学進学を機に島根を出て、その後島根に戻って活躍する本宮さんの経験と葛藤を跡付けることで、どのような経験が、彼女の核となる一つの言葉「帰ってこれる島根をつくろう」へとつながったのかを読み解かせるもので、受験生の読解力と要約力、文章構成力を見るものである。

設問(3)は、<資料A>と<資料B>それぞれのキーワードとなっている「帰ってきたい/こられる」地域、「帰ってこれる」地域の適切な理解を踏まえ、受験者自らが「帰ってきたくなる地域」とはどのような地域だと考えるかを論述させ、その問題関心や論

理的思考力，文章構成力をみるものである。